国語

注意

1 問題は 1 から 5 までで、14ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。

2 検査時間は**五〇分**で、終わりは**午前九時五〇分**です。

3 声を出して読んではいけません。

4 答えは全て解答用紙に**ＨＢ又はＢの鉛筆**（**シャープペンシルも可**）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい**。

5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や。や「などもそれぞれ一字と数えなさい**。

6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄から**はみ出さないように書きなさい**。

7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。

8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、**その数字の〇の中を正確に塗りつぶしなさい**。

9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 国際社会への著しい貢献が見られる。

(2) 特定の食材を禁忌とする文化がある

(3) 会議の場を牛耳る。

(4) 情熱のあまり長広舌をふるう。

(5) 堅忍不抜の精神で傑作を作り上げる。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 事業を成功にミチビく。

(2) ギンマクのスターに上りつめる。

(3) 植物のヤッコウ成分を調べる。

(4) 自らをアオニサイと謙遜する。

(5) キュウテンチョッカ、問題が解決した。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

高校一年生の倉本歩は、陸上部の練習に自主的に参加し、五千メートルを走っている。

蝉の声を聞いた気がした。まだ、そんな季節ではないというのに。

足をひきずるようにしながら、最後の一周に入る。コーナーを一つずつクリアするごとに、「あと二つ、あと一つ。」と確認する。最後のコーナーを回り終えたところで、前方の＊フィニッシュライン上で手を振っている人がいた。

片手にバインダー。真白な頭と、黒いジャージ。

「頑張れー！　あと少し！」

高瀬先生だ。

励まされて少しだけ力が湧いた。お腹に力を入れ、足を踏ん張る。そして、フィニッシュラインを越えると同時に、地面に倒れ込んだ。脚の付け根が棒になったようだ。

仰向けになると、この季節にしては強い日差しが、顔に足に容赦なく降りかかった。大量の汗をかいたはずなのに、鼓動に合わせて新しい汗が次から次へと溢れ出してくる。このまま溶けてしまいそうな勢いだ。そのくせ喉がからからで、水場に行きたいのに、立ち上がるどころか、指一本を動かすのも億劫だ。

そして、相変わらず耳の中で蝉がジージーと鳴いている。その蝉時雨の狭間で、誰かが話しているのが聞こえてきた。

「……気になるのは、フォーム……。あまり綺麗な走り方ではないですね。」

後藤田コーチの声だ。

「そうだ。最初と最後は別人だった。」

相槌を打っているのは高瀬先生。

(1)がっかりする。

中学時代、駅伝に出場する際に正しいフォームの手ほどきを受けていたのに、今日は途中で崩れてしまっていたようだ。

「最後まで走ろうとしていた根性は買う。たとえ才能があっても、走りたがらない選手よりは……。」

話をよく聞こうと頭を動かしたら、コーチがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。立ち上がり、ウエアについた埃を払った。湿気を吸った埃は、うまく落とせない。

一緒に走った上級生や一年生達が、何事もなかったように＊ダウンジョグを始めていた。

「もう走りたくないでしょう？」

上から見下ろされたから、胸を張って自分を大きく見せるようにした。

「平気です。これぐらい。」

精一杯、虚勢を張る。

後藤田コーチは「へぇ」といった表情をした。

「多少は走れるようだけど、大会の経験は？」

「中学三年の秋に、駅伝の大会に出ました。地区大会を勝って全国大会の予選に進みました。そこで……、負けました。」

「私は記憶力がいいんだけど、倉本という名前に覚えがない。」

「中学時代はソフトボール部所属で……。長距離走は得意だったので、陸上部の顧問に声をかけられて……。中三の秋に駅伝のメンバーに加わりました。」

「トラック競技には出場してなかったんだな？」

「してません。でも、駅伝は走りたいんです。走っていて、とても楽しかったです。」

「楽しい？」

目を細めた拍子に、コーチの片方の頬がぴくんと引きつった。

(2)

「舐めてるわね。」

走りきった後の心地よい高揚感が、一気に降下してゆく。

「陸上部員達が辛い練習に耐えていた間、あなたは一体何をしていたの？」

頭から冷たい水をかけられた気がした。膝が震え、今にもその場に座ってしまいそうだった。

陸上競技の練習は走るばっかりで、面白くなさそう。

それに、走る練習ばかりしてる割りには、一緒に走ると自分より遅い子もいる。弟の勝男だって、陸上部のくせに全然走れてない。

練習なんかしなくても、自分は速く走れる。

だから、自分は並みの人間じゃない。

そんな勘違いと驕りを、後藤田コーチは一日で見抜いてしまったのだ。

コーチは無言のまま歩の顔を見ている。こうしている間にも、考えている事を全て、読み取られていそうだ。

「陸上競技は練習も地味だし、マスコミの扱いも、球技やフィギュアスケートなんかとは比べものにならないぐらいお粗末。実業団の大会はガラガラで、半分も席が埋まってない。それなのに、駅伝とマラソンだけは別格。沿道に人が溢れ、延々と生中継で放送される。駅伝なんて国際大会の種目に入ってないのに。だから、勘違いする子が出てくる。あなたも、陸上じゃなくて駅伝が好きなんでしょ？」

返す言葉がない。

「私達が最終的に目指しているのは、将来、トラック競技の中長距離やマラソンで、世界を視野に入れた活躍ができる選手を育てる事。駅伝は、あくまでトレーニングの一貫。沿道の人に応援してもらいたいとか、マスコミに注目されたいとか、その程度の考えの子は来て欲しくないの。」

頬が熱い。

悔しさからではない。体の内側から起こる、正体の分からない感情からだ。

自分が駅伝をやりたいと思った動機は何だったんだろう？

ただ、楽しかっただけ？

違う。

中学時代はこれといった目的もなく、流されて生きていた。友達が一緒だからと安易に部活や進学先を決めてしまっていた。それが、駅伝に出会ってからは自ら担任に掛け合い、両親に何の相談もなく志望校を変え――。

自分を突き動かしたものは一体、何だったのだろう？

さっと一人の少女の姿が、頭の中を駆け抜けた。

あ……。

目を閉じると、浮かんでくる。可憐な美少女が、美しく走り、美しく勝つ様が。

そうだった。

店に置かれたテレビで、同い年の女の子の走りに圧倒され、焦がれるような思いを胸に抱いたのだった。

「強くなりたいです！」

自分でも驚くほどの大声で、コーチも弾かれたように目を見開いた。

「全国大会に出てる一流選手みたいに速く、綺麗に走って……、大会で勝ちたい……。少しでも近付きたいです。」

――彼女に……。

走る姿だけで歩の価値観を覆してしまったあの子。あの子のようになりたいのだ。

「お願いです！　速く走れるようにして下さい。同じになれんでもいい。少しでも、今より強くして下さい。」

コーチがじっと顔を見ていた。

「そんなに、走るのが好きなの？」

「は、はい。好きです。大好きです！　今からでも走れます。」

嘘ではなかった。

走っている時はあんなに苦しくて、もう走りたくないと思っているのに、

終わってみればまた走りたくなっている。今だって「もう一度走れ。」と言われたら、やっぱり走ってしまうだろう。

(3)ふっと溜息の音がした。

「そう言ってられるのも、今のうちだけ……。」

後藤田コーチは背中を向けると、さっと手を振った。ちょうどダウンジョグを終えた部員達が水分を補給していた。すかさず、南原さんの声が轟く。

「集合っ！」

速やかに集まる陸上部員達。今日の練習は終了だ。部員達は、高瀬先生とコーチの前に立ち、「はいっ！」、「はいっ！」と連呼している。

高瀬先生の口が動いているが、何を言ってるのか聞こえない。

並んだ部員達が一斉にこちらを見た。総勢十三人。息を呑む音が、聞こえたような気がした。

「畑谷っ！」

後藤田コーチの一声で、「はいっ！」と畑谷さんが手を上げた。

「一ヶ月遅い始動になるから、面倒を見てやって。以上、解散っ！」

(4)呆然と立っていると、畑谷さんが走り寄ってきた。顔が強張っている。怒っているのかと思ったら違った。

「凄い……。倉本さん。本当に、あのコーチが折れた……。」

顔を覆って、笑い出したいのを堪えている。

「……やったね。おめでとう……。」

「え、え……。」

何かの冗談じゃないかと思った。

今日の自分の走りは最低だったし、コーチからは考えの甘さを指摘された。絶望の底に落とされたような気分でいたから、すぐには信じられなかった。

（蓮見恭子「襷を、君に。」による）

〔注〕フィニッシュライン――ゴールライン。

ダウンジョグ――運動の後、調子を整えるために走ること。

〔問1〕(1)がっかりする。とあるが、なぜ歩はこのように思ったのか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　必死に力を振り絞って走り終えたが、部員たちに自分の走り方を批判されたから。

イ　最後の一周で応援してくれた高瀬先生に、自分のやる気のなさを指摘されたから。

ウ　思った以上に長距離を走るのが辛く、選手としての力量や体力の不足を感じたから。

エ　正しい走りのフォームを知っていたはずなのに、その通りに走り通せなかったから。

〔問2〕(2)「舐めてるわね。」とあるが、このときの後藤田コーチの心情を五十字以内で書け。

〔問3〕(3)ふっと溜息の音がした。とあるが、このときの後藤田コーチの心情として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　疲れ果てているにもかかわらず、今からでも走れると強がる歩の幼さにあきれかえっている。

イ　自分の言うことを聞かずに、ただひたすらに自分のことを語る歩の話に、怒りを感じている。

ウ　歩の陸上に対する熱意がいつまで続くか危ぶみながらも、今は入部を認めようと思っている。

エ　陸上部に入部したいと情熱的に語る歩に感動し、自分の言葉が厳しすぎたと反省している。

〔問4〕 (4)＿＿＿＿＿＿ 顔が強張っている。とあるが、このときの畑谷さんの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　後藤田コーチから新たな役割を命じられ、しかたがないと思いながらも不満をにじませている。

イ　歩の望みがかなってうれしいが、厳しいコーチの手前、喜びをあらわにするのを我慢している。

ウ　部員たち全員が予想した通り、歩の希望がかなったことに、友人として喜びをかみしめている。

エ　いつもは厳しいコーチに、歩だけが希望を受け入れてもらったことを、ねたましく思っている。

〔問5〕 本文の表現を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　歩の描写に比喩表現を多用することで、様々な出来事をきっかけに変化する歩の心情を分かりやすく表現している。

イ　会話文の中に「……」を多用し、述語部分をぼかすことで、登場人物たちが抱いている歩への反感を暗示している。

ウ　歩が回想している場面を全て現在形で表現することで、出来事を時系列に従ってとらえるように配置している。

エ　蟬の鳴き声で季節感を具体的に表し、真夏の炎天下で走る苦しさを読者にも共感できるように印象付けている。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

生物の行動が合目的的だということは、古くからよく知られていた。ただし、たとえば私が学生だったころは、そのことはかならずしも強調されなかった。(1)なぜなら、「目的」ということばが嫌われたからである。目的というのは擬人的なことばの使い方である。人間の行動には目的があるが、生物がそうした目的を「意識」しているはずがない。昆虫は＊ファーブルが描くように、じつにみごとな行動をする。それでもかれらには、まさに「目的意識」があるわけではない。

＊トックリバチは泥で＊とくりじょう状の巣を作る。なかに幼虫の餌になる虫をいれ、それに卵を産みつけ、徳利に蓋をして立ち去る。ハチが蓋をする前に、徳利の底を抜き、なかの餌を取り除いても、ハチは平気で蓋をして立ち去る。かれらは自分が「なんのために」蓋をしているのか、それを考えていない。中身がなくなってしまえば、蓋をする作業など、まったく無意味ではないか。だからトックリバチが巣に蓋をする行動は、単なる機械的な作業である。そうした行動をすることを、かつては「本能」と呼んだ。本能に目的はない。むしろわれわれが機械が動く機構を解明するように、本能を解明すればいい。そこに目的ということばを持ちこむことは、非科学的な態度である。

こうした考えは、たとえば私が学生だったころには、まだたいへん強かった。科学のなかに、目的などということばを、そもそも持ちこむな。実際に私はそういわれた覚えがある。いまになれば、それがなぜだったか、よく理解できる。科学もまた、時代とともに考え方が変化する。当時の自然科学における思考は、十九世紀の物理・化学の常識という尾を引いていた。物理や化学の対象は、生物ではない。物理なら、たとえば天体の動きが問題であり、化学なら分子のふるまいが問題である。そんなところに「目的」ということばが使えるはずがない。それをあえて使えば、説明のための擬人法になるだけである。生物学はそうした物理や化学と同等の科学になろうとし、しかもなかなかそうはなれないでいたから、「非」科学的と見なされることばを可能なかぎり避けることによって、ちゃんとした科学であろうとした。そこでは生物の行動の大きな特徴である合目的性は、むしろ隠されてしまったのである。

その合目的性が、生物学に大手を振って入ってきたのは、生物学が本当の意味で、物理や化学と同等になってきた、＊分子生物学の時代である。＊セント＝ジェルジはそのはしりである。＊フランソワ・ジャコブとともに遺伝子の＊オペロン説を発表し、後にノーベル賞を受賞した＊ジャック・モノーは、一九七〇年に『偶然と必然』を書いた。このなかでモノーは、生物の特徴として、

(1)合目的性
(2)自律的形態形成
(3)複製の不変性

の三つを挙げる。ここでは「目的」ということばが、生物学の当の対象である生物の特徴として、まず大前提に入ってきてしまう。生物とは合目的的なものだ、と。

生物学が物理・化学的な方法論を十分に手にしたと考えられる時代になって、はじめて目的は堂々と生物学のなかに現れてきたわけである。このことは、脳の科学を考えるときにも、忘れてはならないことである。脳にも、生物の場合の「目的」と似たような問題が存在するからである。それが意識である。これは、すでに述べたように、従来の自然科学の世界では、「主観」として排除されてきた。しかし、脳の科学が意識を排除しては成り立たないことは、だれでも理解できるであろう。そもそも意識がなければ、われわれは科学などというものを、創り出す必要すらなかったのである。(2)事実、人間以外の動物は、そんなものはなくても、ちゃんと生

き延びているではないか。

公平のためにつけ加えるなら、意識の場合と目的の場合では、大きな点でじつは違いがある。[3] それは、合目的性については、すでに十九世紀には、機械的な機構によって説明できることが知られていたことである。ただその説明には、賛否両論があったために、一般的には認められていなかったといってもよいであろう。あるいはよく理解されていなかったといってもいい。その説明とは、ダーウィンの自然選択説である。

自然選択説は、突然変異と選択の組み合わせによって、合目的的行動が成立することを示唆している。これはある意味では革命的な理論だったから、多くの人がこれに反対するか、強い留保をおいた。すでに述べたファーブルも、行動の自然選択説に対する反対者の典型だった。ダーウィン自身、たとえば眼のような精巧な器官が、自然選択のみによって成立することに、なんらかの疑いを持っていた。それは、『種の起原』のなかで自説の弱点に触れた部分からも明らかである。もっとも眼の進化は、行動の進化ではない。ここではその議論にさらに立ち入ることはしない。しかし、ともあれ生物の合目的性は、ニュートン力学的な因果関係としてではないが、統計力学的な視点からなら、「機械論的に説明可能」であることが示されていたのである。意識については、まだそうした理論はない。もちろん、意識の場合には、後にも述べるように、別の理解の仕方が必要だと思われる。

生物の行動が合目的的であることは、すでに述べたように、遺伝子という情報系において、すでに成立したものだと理解できる。脳がない生物でも、合目的的に行動するからである。しかし、脳というもう一つの情報系があれば、そうした行動の合目的性は飛躍的に高まることは、日常的にも理解できるであろう。人間のやっていることが、まさにそれだからである。脳がそうした合目的性を追求するのは、遺伝子系の性質を受け継いだからと考えられる。ただしその点についての議論は、当面まだとうてい十分だとはいえない。ここでは遺伝子系が行動の合目的性を成立させ、神経系がそれを拡大したと述べておくしかないであろう。

さて、情報の入出力系における重みづけについて、それを意識は好き嫌いや感情として把握する、と述べた。それでは行動の合目的性を、意識はふだんどのように把握しているであろうか。もちろん合目的性とは、重みづけの場合と同じように、行動を「客観的」に観察したときの表現である。われわれは、さまざまな行動を意図的に、つまりある目的をもって遂行する。その意味では、目的ということばが、まさに意識が把握した合目的性ではないか、といわれるかもしれない。しかしわれわれは、行動のいちいちの過程自体について、その目的を把握しているわけではない。

じつはわれわれの意識は、ごく日常的な表現で、自分の行動の合目的性を理解できる形で把握しているのである。それはすなわち「ああすれば、こうなる」「こうすれば、ああなる」である。「こうすれば、ああなる」型の考えは、典型的な合目的思考なのである。「こうすれば」と考えた結果、「ああなる」のが具合が悪ければ、意識はそういう行動を採用しない。具合がよければ、ただちに採用する。意識はこのようにして、合目的行動をたえず検証しているのである。

考えてみると、現代社会がこの「ああすれば、こうなる」原理によって、むしろその原理のみによって運営されていることに気づかれるであろう。「明日は学校に行く」から、山に昆虫採集にはいけない。給料をもらうためには、今日は仕事に出かけなければならない。こうしたごく日常的な「ああすれば、こうなる」から、会社であれば企画書、官庁であれば来年度の予算編成、これらのすべてが、同じ論理に基づくことに気がつく。というよりも、それがあまりにも当然であるため、それ以外の世の中のありかたなど、考えたことがないというのが本当のところではなかろうか。この考え方が、しかし、客観的には合目的行動なのである。

こうした合目的思考が成り立たない状況を、われわれはたとえば危機と呼ぶ。現代では危機管理が問題とされるが、危機とは、合目的行動が当面

成り立たない状況をいう。したがって危機「管理」とは、状況をいかに合目的的に変換するか、ということなのである。危機においては、意識は「ああすれば、こうなる」ができなくなるので、「どうしたらいいか、わからない」となる。そうなった状況では、動物ではただちに試行錯誤が発生することになる。部屋のなかに飛び込んでしまった鳥は、たちまちガラス窓に頭をぶつけることをくり返しながら、外へ出ようとする。目的は明白だが、行動の過程がランダムとなるのである。合目的性と試行錯誤、この二つが神経系という情報系の出力に、もっとも基本的に与えられた性質らしい。

(4) 神経系のなかでは、こうした試行錯誤から、逆に合目的行動が成立する。それは心理学におけるネズミの迷路実験がよく示すとおりである。迷路の中央に餌をおき、ネズミを入口におく。最初のうちは、ネズミはそれこそ試行錯誤をくり返しながら、やっとの思いで餌に到達する。しかし、しだいに慣れていくとともに、ほとんどムダのない経路で餌に到達するようになる。

こうした試行錯誤から合目的行動へという過程は、考えてみれば、行動の進化における自然選択説にそっくりではないか。進化の過程では、能率が悪い、あるいは誤った行動を示す個体は、やがて排除される。こうして「より正しい」行動を引き起こす遺伝子が、より多く選択されていく。心理学者が個体について行っている実験を、自然は遺伝子集団に対して行うだけのことである。さらに考えるなら、われわれの行動が、試行錯誤と合目的性の結合で成り立っていることから、われわれは自然選択説を理解するのかもしれないのである。脳のなかにない法則を、われわれは理解できないはずだからである。やや面倒な話に聞こえるかもしれないが、自然選択説が成立するのは、基本的に行動についてではないかということが、さらに示唆される。

現代社会、とくに都市社会の原理が「ああすれば、こうなる」であることは、さまざまな興味深い示唆を与えてくれる。もっとも基礎的には、こうした意識的な合目的的な行動過程が、遺伝子の原理と同じだということに留意すべきである。生物の持つ二つの異なった情報系の原理の一致が成功の要件であり、実際に人間の都市社会はその結果として、これまでのところ、進化的にも大きな成功を収めたというしかない。しかし同時に、そこには別な問題が発生するであろうと予測される。そうした社会では、現代人がそうであるように、「ああすれば、こうなる」のみが、すでに述べた「現実」に転化することになるからである。そうなれば、試行錯誤は背景に退く。だからこそ危機であり、だからこそ、その危機の管理なのである。

（養老孟司「考えるヒト」（一部改変）による）

〔注〕ファーブル――フランスの昆虫学者。
トックリバチ――ドロバチの一種。体長一五ミリ前後。
徳利状（とっくりじょう）――中空で、首が細く、胴体が膨らんださま。
分子生物学――生命現象を、分子を使って説明することを目的とする学問。
セント＝ジェルジ――アメリカの生理学者。
フランソワ・ジャコブ――フランスの遺伝学者。
オペロン説――一九六一年に発表された、遺伝子についての仮説。
ジャック・モノー――フランスの生物学者。
ダーウィン――イギリスの自然科学者。
『種の起原』――一八五九年にダーウィンが発表した、進化論についての書籍。
ニュートン力学――イギリスの物理学者、アイザック・ニュートンが、運動の法則を基礎として構築した力学の体系。
遺伝子という情報系――筆者は、脳を、遺伝子系と神経系の二つの情報系によってとらえられると述べている。

情報の入出力系における重みづけ――筆者は前章で、ヒトは、自分の生きている世界の像を、五感から入るものを通して作り出すが、その際、無意識に、好き嫌いや価値観、からだのつくりなどによって、特定の像を選びとっている、と述べている。

〔問1〕(1)なぜなら、「目的」ということばが嫌われたからである。とあるが、「嫌われた」のはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　生物の行動が合目的的なものだということは、近年明らかになったことであるため、当時は誤った説明とされたから。

イ　物理学や化学では使わないのに、生物学においてだけ「目的」ということばを使っても分からないと考えられたから。

ウ　生物の行動は、「目的」とは無関係なので、人間の行動について「目的」ということばを使うのはよくないとされたから。

エ　生物には機械的な作業をする「本能」はあるが、人間のような「目的意識」はないので、擬人的な言い方を避けたから。

〔問2〕(2)事実、人間以外の動物は、そんなものはなくても、ちゃんと生き延びているではないか。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　人間以外の動物は、自分たちの行動が原理に反するものであっても、生き延びることができているということ。

イ　人間以外の動物は、それぞれの個体が意識的に行動することによって、生き延びることができているということ。

ウ　人間以外の動物は、自分たちの行動がどんな原理に基づくか分からなくても、生き延びることができているということ。

エ　人間以外の動物は、目的意識がなくても、その場にふさわしい行動をとったものが生き延びることができているということ。

〔問3〕(3)それは、合目的性については、すでに十九世紀には、機械的な機構によって説明できることが知られていたことである。とあるが、「機械的な機構」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　生物の行動は個体ごとに徐々に修正されていき、最終的に生存の目的にかなった形に落ち着くということ。

イ　生物が生存のためにとる全ての行動が、脳という精巧な器官とその機能によって決められるということ。

ウ　生物の行動は、無秩序に変異するのではなく、個体が生き延びるために選択するものであるということ。

エ　生物の行動はランダムに変わるが、目的にかなう行動をとった個体が結果的に生き残っていくということ。

〔問4〕(4) 神経系のなかでは、こうした試行錯誤から、逆に合目的行動が成立する。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　危機においては、状況にふさわしい行動を見付けられなくなってしまうが、それまでの経験から正しい行動が判断できるということ。

イ　危機においては、目的に基づいて思い付くままに行動するが、行動を修正することで次第に正しい行動に近づいていくということ。

ウ　危機においては、正しい行動は試行錯誤をしても見付からないが、目的にふさわしい行動が直観的に選び出されるということ。

エ　危機においては、見いだされる目的は様々だが、その中から目的を選び出して試行錯誤することで正しい行動がとれるということ。

〔問5〕筆者は、現代社会が「ああすれば、こうなる」原理のみによって運営されていることの問題点を挙げている。これに対してあなたは、このような社会でどのように生きるべきだと考えるか。具体的な例を挙げて、**二百四十字**以内で書け。なお、、や。や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

歌が書き留められるようになると、歌で宮廷などの集団や、個人の心情の歴史を辿ることが可能となる。そうすると、今度は逆に、歌を集めたいという欲求が生まれてくる。つまり、「歌集」が誕生するのである。最初の歌集は、それぞれの氏*の歴史を、その時々に歌われた歌によって書き留めるものとして、出発した。さらには、個人の歌集が生まれてゆくことになる。『万葉集』以前に存在した歌集には、次のようなものがある。

▽「古歌集」と「古集」とが同一のものかは意見が分かれるが、『万葉集』巻二、七、九、十、十一の五巻の資料とされている。古いという名を負っていることを考えれば、平城遷都の七一〇年以前の歌々が集められた歌集と見られていたのであろう。

▽「柿*本朝臣人麻呂歌集」は、巻二、三、七、九、十、十一、十二、十三、十四の九巻の資料となっている。ただし、人麻呂の歌を集めた集なのか、人麻呂が歌を集めた集なのか、さらには単に人麻呂の名が冠されているだけなのか、判断が難しい。

▽「類聚歌林」は、*山上憶良が編纂した歌集で、巻一、二、九の三巻の資料となっている。一定の分類指標をもとに、作者や歌ができた事情が記されていたようである。

▽「*笠朝臣金村歌集」は、巻二、三、六、九の四巻の資料となっている。おおむね金村自身の歌と見られている。

▽「*高橋連虫麻呂歌集」は、巻三、八、九の三巻の資料となっている。おおむね虫麻呂自身の歌と見られている。

▽「田辺福麻呂歌集」は、巻六、九の二巻の資料となっている。おおむね福麻呂自身の歌と見られている。

▽大伴氏関係資料、*大伴家持歌日記。これは、先行歌集として、その名を留めないが、もっとも大きな編纂資料である。

(1)『万葉集』が編纂された八世紀の中葉には、こういった「先行歌集」といわれるものが、すでに点在していたのである。そういう宮廷の歌集、氏の歌集、個人の歌集を集成し、そこから歌を取捨選択して編纂された歌集が、『万葉集』なのである。今日、先行歌集は、すべて散*逸して見ることができないが、大伴家持の歌日記をもとにして編纂された巻十七～二十を見ると、そういう歌集のありようを垣間見ることができるのである。

(2)歌は記されることによって、個人の心情を表現するものとなり、個人の心情を表現する歌を集めて歴史を振り返る歌集が生まれたのである。

では、このような漢字との出逢いによる歌の変化は、日本にのみ起こった現象なのだろうか。それは、世界中のどこにおいても起こり得る現象であったと思われる。中国の紀元前九世紀から紀元前七世紀の詩を収める『詩経』の時代の詩から、建安年間（一九六～二二〇）までの詩も、個人の心情を表現するものというよりは、その時と場で役割を果たす口から耳、耳から口へと歌い継がれる歌であった。中国の詩や歌も、「いつ」「どこで」「誰が」という一回生起的な感情を表現するものではなかったのである。まだ、個人の心情を表現するものではなかったのである。中国において、詩が個人の心情を表現するものになっていったのは、いわゆる建安七子（*魏の曹操のもとに集まった七人の文学者）以後のことである。これは、中国社会において、漢字の定着がもたらした現象ということになろう。この文字の普及が、広い地域の人びとを束ねる国家を生み出し、歴史を誕生させ、歌を個人の心情を表現するものに変えたのである。そこから、詩文を書くことこそ、国家を作ることだという思想が生み出されてゆくことになる。魏文帝（曹操の後継者で、一般には曹丕の実名で知られる。一八七

～二二六）の「典論論文」は、まさしくそういった詩文の役割を述べた文章である。

非常に有名な文章なので、少し長いが原文の読み下しを引用しておく。そのあとに訳文（拙*訳）を示そう。

【A】

蓋し文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり。年寿は時有りて尽き、栄楽は其の身に止まる。二者は必ず至るの常期あり、未だ文章の無窮なるに若かず。是を以て古の作者、身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見し、良史の辞を仮らず、飛馳の勢ひに託せずして、声名は自ら後に伝はる。

訳　そもそも、文章を書き、それを残すということは、国を治めるうえで、欠くべからざる重大なる事業なのであって、永久不滅の偉大なる営みといえよう。人の寿命などというものは、しかるべき時がくると尽きてしまうもの――。栄華や快楽も、それは生きている間だけのことである。栄華と快楽の二つは、必ず失われてしまう、しかるべき時というものがあって、これを避けられず、文章が永久であるのに及びもしない。そこで、古来、文章家たちは、文をものすることに身をささげ、書物に自らの思いを表して、優秀な史書編纂官たちの言葉も借りず、また権力者たちの力も頼らずに、その名声がおのずから未来に伝えられてゆくのである。

まるで、文学至上主義宣言のように読める文章である。国造りは、まず文章からはじまるのだ。(3)よき文章こそが、よき国を作るのだという理想を示した文章である。この理想があればこそ、『*史記』『*漢書』も編纂されるのであり、詩文集も編纂されるのである。また、中国の官吏登用試験である科挙に、作文や作詩があるのも、このためである。『古事記』『日本書紀』『万葉集』が編纂されたエネルギーの根源も、当該の思想にあるといっても、(4)過言ではない。漢文によって作られた帝国は、漢字によって、自らの歴史を語るべきであり、それこそが東アジア漢字文化圏の一員になる重要な資格だったのである。

もちろん、日本は漢字文化の後進地域であった。しかし、後進地域には、後進地域の利点というものもある。先進地域が長い時間をかけて発展していった歴史を、短い期間で体験できるのである。ヨーロッパが経験した産業革命以来の二百年の発展の歴史を、アジア諸国が百年から五十年で経験したのと同じだ。手紙→電信→電話→インターネットの普及に要する時間は、後進地域に普及する方が短くて済んでいる。中国において三千年かけて普及した漢字を五百年で普及させ、七世紀の終わりには、日本の歌も個人の心情を表現するものになっている、といえよう。中国の詩文集である『文選』（六世紀前半成立）を学ぶことによって、漢字を学ぶことのできる貴族層の歌から、歌は個人の心情を表現するものに変わっていったと思われる。(5)『文選』なくして『万葉集』なし、ということができよう。

（上野誠「万葉集講義」（一部改変）による）

〔注〕氏――男系祖先が同じ血縁集団、氏族を表す。「朝臣」や「連」は「姓」で、朝廷との関係を示す。

柿本朝臣人麻呂・山上憶良・笠朝臣金村・高橋連虫麻呂・田辺福麻呂・大伴家持――いずれも奈良時代の歌人。

散逸――まとまっていた書物や収集物などが、ばらばらになって行方がわからなくなること。

魏の曹操――中国、三国時代の国、魏の始祖。

拙訳――自分が書いた訳をへりくだって紹介する表現。

『史記』――紀元前二〇〇年頃、中国前漢の時代に司馬遷によって編纂された歴史書。
『漢書』――紀元前二五〇年頃、中国後漢の時代に班固によって編纂された歴史書。

〔問1〕(1)『万葉集』が編纂された八世紀の中葉には、こういった「先行歌集」といわれるものが、すでに点在していたのである。とあるが、『万葉集』以前に存在した歌集についての説明として正しいものはどれか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 「古歌集」と「古集」は、それぞれ七世紀と八世紀に別々に成立した歌集で、「古」の名を負っている点で共通している。
イ 「類聚歌林」は、山上憶良が自分の作品を一定の分類指標で編纂した歌集で、作歌の事情が記録された資料として貴重だ。
ウ 「田辺福麻呂歌集」は、ほとんどが福麻呂自身の歌だが、『万葉集』の資料として、わずか二巻分にしか活用されていない。
エ 「大伴家持歌日記」は、『万葉集』が最も参考とした資料として知られるが、どの巻が参考にしたかは分からない。

〔問2〕(2)歌は記されることによって、個人の心情を表現するものとなり、個人の心情を表現する歌を集めて歴史を振り返る歌集が生まれたのである。とあるが、その経緯として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 漢字によって和歌は記録されることが可能になったが、個人の心情を集めるうちに、さらに一族という集団での心情を集めたいと人々が考えるようになり、歌集が作られた。
イ 個人の心情を表現する和歌は、漢字との出会いによって集団の歴史を表現するようになり、一回生起的な心情ではなく、歴史書として歌集がまとめられるようになった。
ウ 中国からの文字の流入によって和歌が誕生したが、和歌で表現される個人や集団の心情を収集し、和歌の歴史を振り返るための資料として、歌集がまとめられた。
エ 漢字によって歌を記録し、歌を通じて個人の心情が表現されるようになった結果、その歴史をたどることが可能になり、それらを集めたいという欲求から歌集が作られた。

〔問3〕(3)よき文章こそが、よき国を作るのだという理想を示した文章である。とあるが、【A】の「原文の読み下し」の文章において、このような「理想」に相当する箇所はどこか。二十字以内で抜き出せ。

〔問4〕(4)過言ではない。のここでの意味として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア　誇張ではない
イ　唐突ではない
ウ　簡単ではない
エ　適切ではない

〔問5〕(5)『文選』なくして『万葉集』なし、ということができよう。とあるが、どういうことか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア　中国から『文選』が輸入される前までは、漢字文化が発達していなかった日本では歌さえも誕生していなかったということ。
イ　漢字文化の後進地域であった日本が、『文選』を学ぶことで短期間で『万葉集』を編纂するほどの文学レベルに達したということ。
ウ　中国では『文選』があって『史記』『漢書』が編纂されたように、日本でも歴史を記録する『万葉集』が編纂されたということ。
エ　成立まで三千年かかった『文選』を中国から輸入することで、日本ではその後わずか五百年で『万葉集』が成立したということ。